

仕事を通して歩み始めた、未来への道

岩持 河奈子

私の仕事は、図書館司書です。念願だった図書館で働く機会を得ることができたため、関東の大学を卒業して故郷岩手に戻ってきました。

図書館で私が行っている仕事は、〈レファレンスサービス〉という、利用者の問い合わせに応じて図書の検索や照会を行う業務を中心としています。問い合わせの内容は、物事の歴史や由来の調査、参考文献の照会など、実にさまざまです。

仕事を始めたばかりの頃は、南部藩をはじめとする岩手の歴史について聞かれても、どの本を探せばよいのか、利用者を前におろおろと時間を費やし、また、「〇〇について知りたい」といわれても、それが一体何なのかがわからず、相手をあきれさせてしまうこともありました。「ここにペテランはいないのか?」「最近の若いのは、ものを知らない」

何もできない自分が悔しくて、泣きたくなるような毎日でした。

月日は過ぎ、3年目の冬を迎えた自分に、いつしか叶えたい夢ができました。定年後、郷土の歴史に精通した郷土史家として学びの場で活躍することです。

日々さまざまな利用者と出会っていくなかで、歳を重ねても学ぼうとする姿は、自分もこうありたいと願う人生の目標となり、また、今まで知らなかった郷土の歴史に触れて、もっと確かな知識を深めていきたいと考えるようになったのです。(同時に、それが当面の課題でもあります)

教科書にも載っていない郷土の歴史は、そこで生まれ育ち、生活する私たちにつながっています。宮沢賢治や、石川啄木のほかにも偉人が大勢いたこと、平泉のように時代を越えて長く受け継がれてきた場所や文化など、郷土の魅力や面白さを、もっと若い世代に知ってほしい。伝えていきたい——、というのが私の願いです。

現実に目を向ければ、少子高齢化や医療福祉、産業や雇用、教育、環境など、問題は山積みだといえます。たしかに、私たちの生活を考えるのは必要なことです。ただ、新しい情報や環境を追い求めるばかりの姿勢には、疑問をおぼえます。

たとえば、教育改革を進めることによって本県の学力テストの成績が上位にあがったとしても、新渡戸稲造や原敬が何をした人なのかわからない、という現状になってしまっただけは、果たしてそれは教育として本当に評価できるのでしょうか。

「岩手には何もない」という若者の声——。私自身も過去にこの言葉をよく使用していました。一見、おしゃれな店や建物、遊ぶところがない、といった安易な意見のように受け取れますが、この言葉の裏には、岩手のことを「何も知らない」という意味が隠されているのではないのでしょうか。

春であれば、石割桜をはじめとする数々の桜の名所の歴史や由来のこと。政治であれば、岩手県は総理大臣を多く輩出し、それぞれの大臣の故郷での心温まるエピソードや、涙あふれる最期など、先人たちが残した誇れる歴史や文化が岩手にはたくさんあることを、私は仕事を通して初めて知りました。先人が築き上げてきた歴史が、時を越えてなお私たちの暮らす土地や町に息づいていると感じてから、岩手に対する見方はがらりと変わったのです。だから、若い世代が岩手のことを何も知らずに通り過ぎてしまうのは、もったいないことだと思うのです。

願わくは十年後の私は、こうした考えを何らかの形で行動に移していたいと思います。「図書館」という生涯学習の場を利用して、「町おこし」ならぬ、「県おこし」の実現を目指したいと考えています。単に座学で伝えるのではなく、生きた歴史や文化として、若い世代に感じてもらうにはどうしたらよいか、十年もあれば、きっと何度も試行錯誤を重ねられるでしょう。

そして、そのときの岩手県の姿は、はたから見ればそれほどの変化は目立たないかもしれませんが。しかし、岩手に愛着をもった若い世代が増えれば、社会のさまざまな分野で活気づくことにもつながっていくはずです。私の考える十年後とは、決してゴールではありません。望むべき未来へと進んでいる真っ只中で十分です。

高村光太郎の詩「岩手の人」のなかにも、「地を往きて走らず企てて草卒ならず ついにその成すべきを成す」とあるように、あわてることなくゆっくりと努力していく姿勢を構えてこそ、岩手らしさを存分に発揮した成果をあげることができるのではないのでしょうか。

故郷を愛する思いや情熱は、どんな場においてもきっと大きな原動力になるはずです。かつて、「岩手には何もない」と言っていた一人が、岩手の未来と自分の夢を重ねるようになったという紛れもない事実が、ここにあります――。

十年後の夢に向かって歩み始めた道は、まだでこぼこだらけで不安定なところもあるけれど、毎日一歩ずつ踏みしめて、前へ前へと進んでいきたいと思います。